

ヤズドのハーン家の 社会経済的背景

——建設事業とワクフを中心として——

近藤 信彰

1. はじめに

18・19世紀のイラン社会における、王朝権力とは一定の距離をおいて地方を実質的に支配したとされる地方有力者の重要性はこれまでしばしば指摘されてきた。しかし、これらの地方有力者の性格を検討するうえで不可欠の要素である彼らの社会経済的背景については、史料的制約もあり、見るべき成果をあげていない⁽¹⁾。その結果、これらの地方有力者が、当時のイラン社会において、あるいはイラン史全体の中でどのように位置づけられるかという問題は未解決のままである。

筆者は先に、18世紀後半から19世紀前半にかけてヤズド地方で権勢を誇ったモハンマド・タギー・ハーン Moḥammad Taqī Khān とその一族（以下、ハーン家とする）について、その台頭の要因、政治的活動、地方社会との関係について論じた⁽²⁾。このハーン家については、さらに、地方史やワクフ (vaqf) 財調査書等によってその社会経済的背景を知ることが可能である。そこで、本稿では、彼らの建設活動とワクフを取り上げ、これらの活動の意義を考察し、彼らの性格の一端を明らかにしたい。

主な史料として、ハーン家の事績をしるした地方史 *Jāme'-e Ja'fari* (略号 JJ) のほか、「ヤズド地方ワクフ財報告書」(Ketābche -e Mowqūfat-e Yazd, 略号 KMY) を利用した。前者は、ハーン家の建設活動について詳細な情報を伝えている。後者は、1257/1841

年に時の宰相 Hājji Mirzā Āqāsī の命により作成されたもので、この地方のワクフ対象施設ごとに、寄進されたワクフ財とその年収、管理人 (motavalli), 収入の用途がしるされており、ハーン家のワクフ行為の概要について知ることができる⁽³⁾。さらに、Īraj Afshār の編集したヤズド史に関する史料集のなかに、モンハマト・タギー・ハーンが建設したマドラサに関するワクフ文書が収められている⁽⁴⁾。先行研究としては、M. Bonine がヤズドのバーザールとワクフについてフィールドワークの成果も含めた論文を発表しており、ハーン家の建設・ワクフに関しては部分的に言及している⁽⁵⁾。

2. モハンマド・タギー・ハーンの活動

(1)建設活動

モハンマド・タギー・ハーンは1161/1748年に権力を掌握して以来、1213/1798年に没するまで、戦乱のなか50年にわたりヤズド地方を支配した。19世紀初めにヤズドを訪れた旅行者たちは、ヤズドのめざましい繁栄を記録しているが、その功は戦乱からヤズドを守ることに努めたモハンマド・タギー・ハーンに帰されるべきであろう⁽⁶⁾。

彼の建設活動を、ここでは(a)ヤズド市郊外の建築群、(b)ヤズド市のバーザール地区の建築群、(c)タフトにおける建築群の三つに分類して、その概要を示そう。

(a)ヤズド市郊外の建築群

この建築群はカナート qanāt (地下水路) とバーク bāgh (園地) からなる。ヤズド地方はキャヴィール砂漠に接し、年間降水量が100mm余りと、イランのなかでも乾燥した地域である。そのため、降雨は期待できず、都市・農村とも水利は主に山岳部から引いてくるカナートに頼っていた。ヤズドのカナート職人は優れた技術を誇っており、いわばカナートの本場であった⁽⁷⁾。また、伝統的なイランの他の都市と同様に、ヤズド市の周囲には以前から多くのバーク、すなわち壁で囲まれた樹木の植えられた園地が建設された⁽⁸⁾。

中心となるのは Qanāt-e Dowlat-ābād である。水源、出口

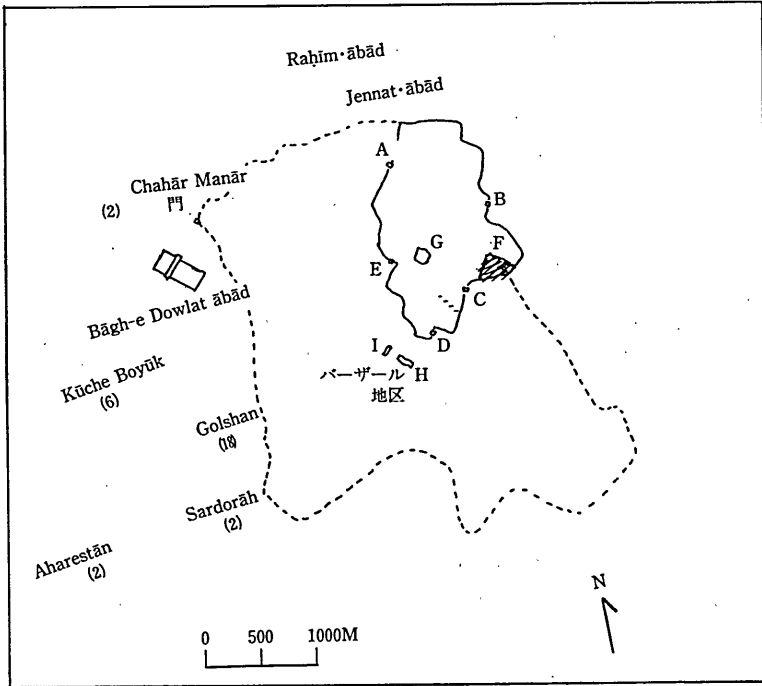
(mazhar)ともメフリージュルド郡にあるが、出口から長さ9ファールサング(約54km)におよぶ水路によってヤズド市と結ばれた大規模なものであった。水量も豊富で、JJによれば150のバークと2000ジャリーブ(2-2.5km²)の土地を潤したという⁽⁹⁾。さらに、メフリージュルド郡に別のカナートを建設し(Qanāt-e Taqī-ābād), 三本のカナートを購入して浚渫・再建した(Qanāt-e Bāqer-ābād, Qanāt-e Baghdād-ābād, Qanāt-e Mahdī-ābād)⁽¹⁰⁾。この5本のカナートはQanāt-e Dowlat-ābādとも総称され、今世紀になってもヤズドで最も重要なカナートとして住民生活を支えていた⁽¹¹⁾。モハンマド・タギー・ハーンはこのカナートをBāgh-e Dowlat-ābādとともに、シーア派イマームの墓廟のためのワクフとしている(後述)。

モハンマド・タギー・ハーンはこのカナートの水を引いて32以上のバークを建設した。なかでも代表的なものはヤズド市郊外にあるBāgh-e Dowlat-ābādであった。イラン遺跡保存国民協会の作成したこのバークの図面がJJに付されているが、これによれば、バーク本体が約34m×74m、前広場(Meydān-e jelow khān)が約34m×37mという巨大なものである⁽¹²⁾。JJによれば、バーク本体には正門(sardar), hashti等の建物と三つの池と一つの小川を備え、果樹など多くの木々が茂り、いわば王侯の庭の風格を持っていたと想像される。前広場には、正門のほか、三方に建物を擁し、謁見場(divān-khāne), 厩舎等もここにあった。また、地下倉庫(zīrzamīnī), 水蔵(maṣno'e)などの設備も整っていた⁽¹³⁾。これらの設備からみて、モハンマド・タギー・ハーンはしばしばここで生活し、政務をとっていたと考えられる。すなわち、このバークは当時のヤズドの政治的中枢だったのである⁽¹⁴⁾。

また、このバークに隣接して水蔵、水庫(ṭāḥūne)とともにカールヴァーンサラール kārīvānsarā を建設し、この施設にはエスファハーン、テヘラン、アゼルバイジャン方面からの隊商が荷を降ろしたという⁽¹⁵⁾。彼は、ヤズド市の北側に建設したBāgh-e Jennat-ābādにもホラーサン方面の隊商用に水蔵とカールヴァーンサラールを併

図1 ヤズド市街

ヤズドのハーン家の社会経済的背景
近藤



- | | |
|----------------|------------------|
| —— 市壁 (14C~) | A Kūshek Now 門 |
| 外市壁 (推定) | B Mālmīr 門 |
| () 内は、 | C Haḡīre 門 |
| モハンマド・タギー・ハーン | D Mehrijerd 門 |
| の建てたバグの数 | E Shāhī 門 |
| | F 城塞 |
| | G 集会モスク (12,14C) |
| | H マドラセイェ・ハーン |
| | I メイダーネ・ハーン |

M. Bonine, *Yazd and its hinterland*, p. 97. fig. 17 をもとに作製

設し、この二つのバグの間を道路 (khiyābān) で結んだ⁽¹⁶⁾。このカールヴァーンサラがキャラヴァンの発着駅という性格をもっていたと考えれば⁽¹⁷⁾、モハンマド・タギー・ハーンの商業の振興を図ると同時にこれに関与しようという姿勢を見ることができる。

一方、モハンマド・タギー・ハーンが建設した残りのバグにつ

いては、このような施設を併置していた形跡はない。これらのバークの分布を示すと、バークは市外の Chahār Manār 門付近に 2, Golshan 地区に 18, Kūche Boyūk 地区に 6, Sardorāh 地区に 2, また近郊 (howme) の Aharestān 村に 2 と分布している (図 1)⁽¹⁸⁾。バークを建設したほとんどの地区が 14 世紀の史料『ヤズド史』にも見える歴史のある地区であり⁽¹⁹⁾、いずれも 19 世紀前半に建設された外市壁より外側である。

特別な施設を持たないこれらの多数のバークは、いかなる目的で建設されたのであろうか。これらのバークの多くが、モハンマド・タギー・ハーンの存命中に一族に分与されていることに注目したい。すなわち、彼は、自分の妻 2 人に 2, 男子 14 人に 16, 女子 3 人に 3, 女婿 2 人に 2, 甥 1 人に 1, 外孫 1 人に 1 という具合に、一族の成員に 1 ないし 2 箇所のパークを与え、これらのバークは Bāgh-e ‘Alī Naqī Khān のようにその所有者の名を付けられているのである。これはこれらのバークが私的、個人的な性格を持っていたことを示しているように思われる。夏には酷暑となるヤズド地方において、木陰を持ち、泉水が流れ、夏別荘を備え、清涼をもたらすバークが発達したことは自然であり、生活に余裕のある都市住民がそれぞれバークを持っていたであろうことは容易に想像される。バークからヤズド市に銃兵を率いて乗り込んだモハンマド・タギー・ハーンが居を構えるにあたって、他の都市住民と同様に私的な生活の場としてバークを望んだのも当然かもしれない。

もちろん、バークは生産の場としての経済的価値も持っていた。今世紀初頭にヤズドに滞在したイギリス人宣教師の記録によれば、ヤズドのパーク内の多くの土地が農作物に割かれていた⁽²⁰⁾。また、ヤズドはメロン、スイカ、リンゴ等果物の生産で有名であり⁽²¹⁾、これらの果物もバークで栽培されていたと考えられる。J. D. Gurney の研究にも示されているように⁽²²⁾、バークは都市住民にとって収入源の一つだったのである。

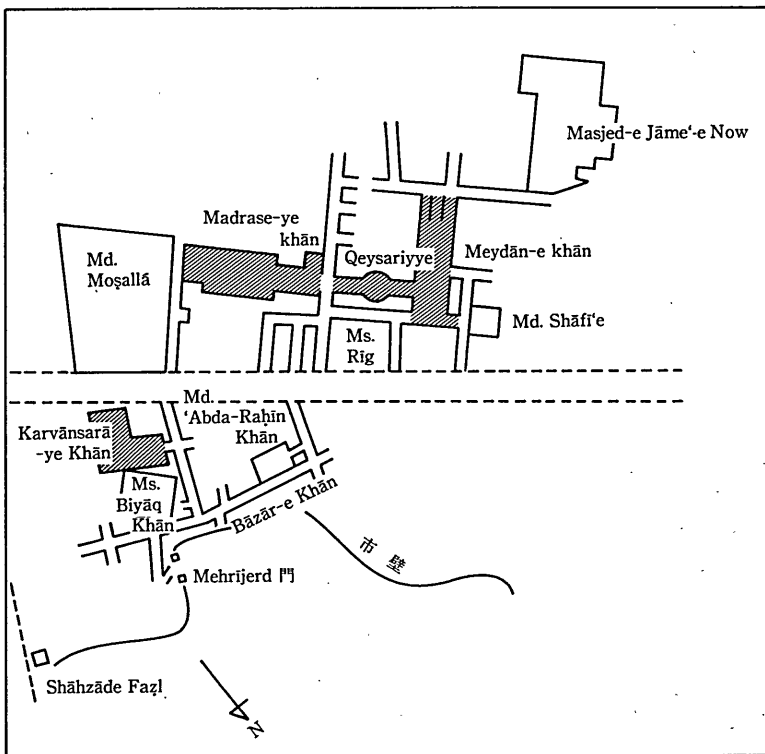
これらの建設が行われた時期を確定するのは難しいが、1172/1758年にキャリム・ハーン・ザンドが Bāgh-e Dowlat-ābād に滞

在していることから⁽²³⁾、遅くともこれまでにこのバークと Qanāt-e Dowlat-ābād が完成していたと考えられる。バーザール地区の建築群に10年以上、先んじていたことになる。

(b) ヤズド市のバーザール地区の建築群

このバーザール地区は、当時、市壁の南側、メフリージェルド門の外側にあり、現在もその姿をとどめている。もちろん、元来は市壁の内側、有名なヤズドの集会モスク (Masjed-e Jāme'-e Kabīr) 周辺が商業の中心であったが、時代が下るにつれ、現在の位置に移っていった⁽²⁴⁾。モハンマド・タギー・ハーン の建築群はマドラサ (学

図2 ヤズド市バーザール



Md. : Madrasa

Ms. : Masjed

Bonine, *Yazd and its hinterland*, p. 98. fig. 98をもとに作製

ハーン家に関する施設

校), ゲイサリーエ, ハーン, メイダーン (広場) からなり, このバーザール地区の中心に位置している (図2)。

① Madrase-'e Khān (1186/1772- 3年建設)

当時ヤズドで最大のマドラサであった⁽²⁵⁾。長男アリー・ナギー・ハーンの建てた小さなマドラサと通路で結ばれていた。二階建て28部屋があり, 3人の教授 (modarres), 20人の学生 (ṭalebe) を擁していた⁽²⁶⁾。この学生達は, 1232/1817年にイスマーイール派教主をめぐるヤズドを二分した騒乱にも中心的役割を果たしており⁽²⁷⁾, このマドラサが政治的にも大きな意味を持ちえたことを示している。建設と同時にワクフが設定された (後述)。

② qeysariyye (1186/1772- 3年建設)

屋根付の商業施設で, 一本の通路の両側に計28軒の反物屋 (baz-zāz) が並び, ヤズドやインド, ヨーロッパの商品を扱って, 繁盛していたという。両端の出入口には堅固な扉があった⁽²⁸⁾。

Bonine の図では位置が不明であるが, JJによれば, ゲイサリーエの中央にさらに二つの施設が建てられた。一つは, Khān-e Golshan であり, 二階建て一階の中庭には小川が流れていた⁽²⁹⁾。卸売商人の事務所として使用されたと考えられ, 1241/1826年にはタブリーズ, エスファハーン, マシュハドなど, さまざまな地方出身の商人が6名滞在していた⁽³⁰⁾。このハーンの向かいに貨幣製造所 (zarrāb-khāne) が建てられた。ここでモハンマド・タギー・ハーンの名を刻んだ貨幣が製造されたという⁽³¹⁾。

③ Meydān-e Khān

JJはモハンマド・タギー・ハーンの建造物に数えているが, 以前からここには Meydān-e Khāje という広場 (850/1446-7年建設) があり, モハンマド・タギー・ハーンによって改修されたらしい⁽³²⁾。Bonine の図によれば, 縦80m, 横24m程, 三方に店舗を配する商業空間であり (KMYには8軒言及)⁽³³⁾, また露店も開かれたと考えられる。後には, 公開処刑もここで行われたというから⁽³⁴⁾, 小さいながらも人出の多いヤズドの代表的広場であったと考えられる。

④ Kārvānsarā-ye Khān

上記の3施設からやや離れている。ヤズドで有名なハーンの一つであり、二階にはシーラーズの商人が住んでいた⁽³⁵⁾。ワクフとはなっていない。

以上のようなモハンマド・タギー・ハーンの建設活動により、バーザール地区の様子は一変した。さらに、彼の子アブドッ・ラヒーム・ハーンによる列状バーザールの建設(後述)、Mollā Esma'il 'Aqdā'i による新しい金曜モスクの建設(1222/1807-8年開始)⁽³⁶⁾、Moḥammad Vali Mirzāの母によるMasjed-e Biyāq Khānの建設(1242/1826-7年)⁽³⁷⁾により、今日のこの地区に現存する施設はほぼ完成した。モハンマド・タギー・ハーンの建設活動はこのバーザール地区の発展に決定的な役割を果たしたといつてよいだろう。

モハンマド・タギー・ハーンの建設活動が市壁内には全く見られず、バーザール地区に集中している背景には、都市ヤズドの周辺への拡大がある。JJが、彼の知事在職中に、市壁外の人口が市壁内の人口を大幅に上回ったと述べていること⁽³⁸⁾、19世紀半ばにこの都市を訪れたイギリス人K. E. Abbottが市壁と外市壁(19世紀前半建設、後述)の間に地区が最も人口稠密であり、街区(maḥalle)の数も市壁内8に対し市壁外16と記していること⁽³⁹⁾により、人口の重心も市壁外へ移ったことがわかる。モハンマド・タギー・ハーンの建設事業は単に商業への投資、教育や商業の振興策というだけでなく、都市ヤズドの拡大・発展をも視野に収めていたのである。

(c) タフトにおける建築群

ヤズドの南西20kmにある小都市タフトとその周辺にも、モハンマド・タギー・ハーンは建設を行っている。まず、タフト市のSard-sir地区のバークが挙げられる。建物、池、浴場を備えた立派なものであった⁽⁴⁰⁾。

次にタフト周辺のMobāreke村とCham村とにそれぞれ一本ずつ計二本のカナートを建設した。この両村の歴史は古く、14世紀まで遡ることができるが⁽⁴¹⁾、モハンマド・タギー・ハーンは、この両村の再開発を行った。すなわち、Mobārekeでは「そのマズラエ(耕地)を数家族の農民(ra'iyyat)の住処とし、…家屋を建て」、ま

たカナートの出口には建物のあるバグを建設した⁽⁴²⁾。Chamではやはり、「耕作の重要事に携わることのできる住人のために、家屋を建設し」、村内に敷いた道の両側は穀物や綿などの農地となった⁽⁴³⁾。カナートによって農地を開発し、労働力を集めて耕作させるという、イランの乾燥地帯に典型的な農業経営形態を見ることが出来る⁽⁴⁴⁾。もちろん、新開地は開発者の所有となったと考えられるから、これらの活動がハーン家の資産形成に寄与したことは言うまでもない。

ヤズド市に比較すれば、タフトの建造物は見劣りするが、州都以外での建設活動とカナートによる農地の開発という方法は第二世代へと継承されていった。

(2) ワクフ

モハンマド・タギー・ハーンが行ったワクフ活動は3件が記録されている。そのうち、Bāgh-e Jennat-ābādをマシャハドのエマーム・レザー廟に寄進したワクフについてはその詳しい内容は不明である。残り二つについて、ワクフ文書によって分析を試みよう。

(a) 1188/1775年のワクフ文書

Madrāse-'e Khānに関するものである。冒頭は失われており、まず、ワクフ管理人の規定が記されている。すなわち、管理人を寄進者すなわちモハンマド・タギー・ハーン本人とし、以後は①長男アリー・ナギー・ハーン②次男アブドッ・ラヒーム・ハーン③三男ゼイノル・アーベディーン・ハーンという順を定め、その次に④この三人の子孫の男子のなかの年長者⑤他の兄弟の子孫の男子のなかの年長者というように続いている⁽⁴⁵⁾。

次にマドラサの運営条件、ワクフ財の一覧、予算の一覧、支出に関する条件という順に続いている。書式としては一般的なものと考えられる。

ワクフ財の一覧をKMYの内容と対照したのが、表1である。概ね一致しているが、店舗の数が異なったり、かつて存在したカナートが荒廃したりしている。一番大きな相違は、ワクフ文書に土地

表1 ハーンのマドラサのワクフ財

| ワクフ文書 (1775年) | | KMY (1841年) |
|-------------------------|-----------------------|---------------|
| (1)Qeysariyye | 店舗 25軒 | 26軒 150t |
| | 店舗(小) 2軒 | |
| | 平台 4個 | |
| | 貨幣製造所 1軒 | |
| (2)店舗 (Qeysariyyeの門外) | 2軒 | |
| (3)製パン店 (バーザール地区) | 1軒 | 1軒 12t |
| (4)錠前店 (貨幣製造所の裏) | 1軒 | |
| (5)Goldfarāmarz(Rostāq) | 水利権 1r(10r中) | 130j 130t |
| | バーグ 15ヶ(15q3ds5dg1/2) | |
| | 土地 12ヶ(11q2ds3dg) | |
| (6)Ṭohre | 水利権 780j(/1560j) | 1/2 荒廃 |
| | 土地 | |
| (7)Jennat-ābād (Jadīde) | (近郊) | 130j 60t1250d |
| | 水利権 130j(/1560j) | |
| | バーグ 1ヶ(14q) | |
| (8)Abromobārek (近郊) | 水利権 65j(/1560j) | 65j 26t |
| | バーグ 1ヶ(6q) | |
| (9)Moryābād (近郊) | 水利権 130j(/1560j) | 130j 88t5000d |
| | バーグ 2ヶ(33q) | |
| (10)Shams-ābād (Meybod) | 水利権 1r(12r中) | 190j 63t9000d |
| | 去地ヶ 1r(15r中) | |
| | 1ヶ | |
| (11)Khiyāreq(Rostāq) | 水利権 1r(15r中) | 1r 無収入 |
| | バーグ 3ヶ(7q4ds) | |
| | 土地 17ヶ(1333q3ds) | |
| 合 計 | | 606t5250d |

単位 r=rūzeshabān j=jorre (カナートにより異なる)

q=qafiz ds=dast dg=dang (1qafiz=6dast=36dang=1000m²)

t=tomān d=dīnār (1tomān=10000dīnār)

典拠 YY 378—383, KMY 30—31

やバグが記してあるのに、KMYには水利権しかない点であろう。60年以上の間にすべての土地やバグが失われた可能性もあるが、水利権には全く変更がないこと、支出条件が「ワクフ文書のとおり」と省略されてしまっていることを考えると、史料KMYの記載の際に省略されたと考えるほうが妥当であろう⁽⁴⁶⁾。

ワクフ財は都市の商業施設と農村の水利権およびバーク・土地との二種からなる。前者の中心となるのは先に述べたモハンマド・タギー・ハーン本人の建設したゲイサリーエと貨幣鑄造所である。これらの施設は単に空間的に隣接しているだけでなく、ワクフ制度でも結びついていたのである。しかし、財源としてより重要なのは後者の方で、KMYでは二つの村が荒廃しているにもかかわらず、全体の約6割を占めている。

さて、ここにあげられている村落・カナートは、いずれも17世紀以前に遡ることができる⁽⁴⁷⁾。また、水利権も(6) Tohreを除いては、1/10から1/24と低い割合にとどまっている。また、ワクフ文書には(5) Goldfarāmarz と(11) Khiyāreq については、寄進されたバグ・土地の境界まで記されており、周囲に所有者の名前のついた私有のバグや土地が広がっていること、前者の村には一つのバグの全部ではなく一部分を寄進した場合が11例あることがわかる。このことから、このワクフ財の多くは既存の水利権・バグ・土地をモハンマド・タギー・ハーンが購入等の手段によって獲得したものであると考えられる。規定によれば、これらのワクフ財は最高3年までの賃貸が認められていた⁽⁴⁸⁾。

また、(5)(6)の村に存在するワクフ財に隣接する不動産について見てみると、さらに興味深い事実が浮かび挙がってくる。それは、「sarkār-e 'ālī の私有地 (melk) / バグ / 土地 (zamin)」という不動産の存在である。ワクフ地が3回、王領地 (khāleṣe) 地が2回しか言及されないのに比して、24回も登場する。melk という語を個人に属する私有地と考えれば、sarkār-e 'ālī は「高貴なるお方」という意味で、寄進者モハンマド・タギー・ハーンを示すことになる。モハンマド・タギー・ハーンはこの二つの村に圧倒的多数

表2 ハーンのマドラサの支出予算一覧

| | 年支出 | ／日 | 賞与 |
|---------|------------|------|----------|
| 管理料 | 35t | | |
| 教授料 | 30t | | |
| 正教授 | 20t | | |
| 準教授 | 10t | | |
| 奨学金 | 103t 750d | | |
| 1人 | 5t 5950d | 150d | 1000d |
| 26人 | 97t 5000d | 100d | 2t 6000d |
| 使用人の俸給 | 7t 3000d | | |
| ハーデム | | 150d | |
| モアッゼン | | 50d | |
| 灯火・燃料費 | 11t 6250d* | | |
| 灯火 | 9t 1250d | 250d | |
| 燃料 | 2t 5000d | | |
| 施設修理費 | 5t 5000d | | |
| 饗応費 | 7t 5000d | | |
| ガディール祭 | 3t 7500d | | |
| アーシューラー | 3t 7500d | | |
| 合 計 | 200t | | |

単位 t=tomān d=dīnār

(原文では、qerān, shāhīも用いられているが、煩瑣なため換算した)

* 原文では、15t 6qerān, 5shāhīとなっているが、小項目の合計、全項目の合計と一致しないため、訂正した。

典拠 YY 384—385

の不動産を所有していたことが明らかになる。

一方、マドラサの支出予算を表にしたのが表2である。当時の物価水準を知るうえでも興味深い。合計は200トマンであるが、規定によれば、収入がこれを超えたときは、この予算と同じ割合で支出することになっていた。また、マドラサの修理予算がわずか2.7%と少ないが、必要な場合には他の支出に優先して支出されることになっていた⁽⁴⁹⁾。

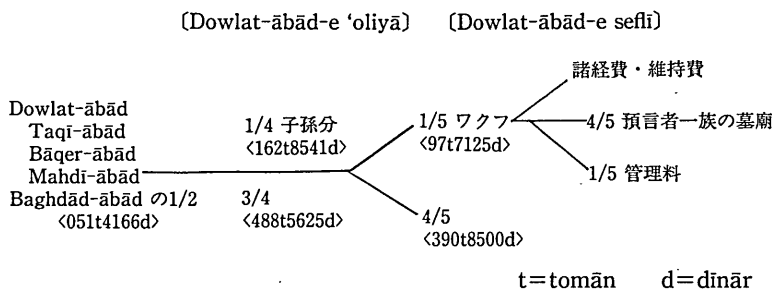
表からまず気付くことは、ワクフ管理料が支出のなかで17.1%と もっとも多いことである。一族の収入に関する十分な配慮がうかがえる。また、アーシューラー、アルバイン、ガディール祭というシーア派の祭日に食事提供を義務づけていることが注目される。

このワクフ文書は収入・支出に関して多くの紙幅を割いているが、その運用に関する規定は緩やかである。たとえば、教授の資格については「町で最も信仰深く最も学識のあるウラマー」という規定しかない。この緩やかな規定のうち、特に定められていることは、学生がカルバラ巡礼の際には4ヵ月の休暇をとることができるというものである(一般には10日)⁽⁵⁰⁾。モハンマド・タギー・ハーンの信仰心は、教学の内容よりもシーア派行事の後援やカルバラ巡礼の励行という実際のなかたちで発露されたと言えるかもしれない。

(b)1212/1797-8年のワクフ文書

預言者ムハンマド、その娘ファーティマと12人のイマーム (chahārdah ma'šūm) の墓廟に対するものである⁽⁵¹⁾。もっとも、KMYでは、「ナジャフの諸殉教地 (moshāhed-e motabarrake' e Najaf-e ashraf)」の項に分類されており⁽⁵²⁾、このなかでもナジャフが最も重要であったことがわかる。文書の形式は①前文、②ワクフ財の説明、③支出・管理の条件、④管理人の設定という順になっている。ワクフ財としては、Qanāt-e Dowlat-ābādの水利権と Bāgh-e Dowlat-ābād と付属する建物、その前広場が挙げられている。

図3 ガナーテ・ドウラト・アーバードの水配分



この文書でまず注目されるのは、この Qanāt-e Dowlat-ābād の水配分を規定していることである (図 3)。5 つのカナートの水 (但し Qanāt-e Baghdād-ābād は 1/2 だけが対象) はまず最初に 1/4 がモハンマド・タギー・ハーンの子孫に分配される。JJ によればこれは Āb-e shāhī という地点である。残りの水をヤズド市近郊まで引き、この 1/5 をワクフとしたのである。KMY では、これは Dowlat-ābād-e seflī と呼ばれており、Baghdād-ābād とあわせて、年 97 トマン 7125 ディナールの収入があった。逆算すれば、カナート全体がどれほどの富を生み出したかがわかる。ワクフとされなかった 4/5 の水利権は少なくとも当初にはモハンマド・タギー・ハーンに属したと考えられるから、一族の取り分はかなりのものになる。

このワクフとなった水の利用は管理人に任されていたが、原則としてまず同じくワクフである Bāgh-e Dowlat-ābād を通すことになっていた。そして、税やカナート管理費、施設の維持費を差し引いたのち、収入の 1/5 を管理料、残り 4/5 を預言者一族の墓廟の諸経費に用いることになっていた。具体的には、墓廟の修理、装飾、絨毯、水、照明等の施設に関するもの、ウラマー、下足番など墓廟に係わる者の住居に関するもの、そして巡礼者や学生・貧者の援助などが挙げられている⁽⁵³⁾。ハーンのマドラサのワクフと同様、管理人は寄進者本人で、年長の男子が継承することになっていたため、管理料も本人か子孫の収入になったと考えられる。

ところで、もし、これが Qanāt-e Dowlat-ābād に関する最初のワクフ文書だとすると、モハンマド・タギー・ハーンの晩年、カナートの完成の 40 年の後にこのワクフが設定されたことになる。しかも、先に述べたハーンのマドラサのワクフには、モハンマド・タギー・ハーンが郊外に建設したカナート、バークの類は一つも含まれていない。これはいかなる理由によるのであろうか。

結局のところ、これはこの二つの建設活動・ワクフの性格の違いに求めることができるだろう。バーザール地区の開発にはヤズド市の発展を図るといった政策的な意図も含まれており、また、マドラサのワクフには施設を運営していくという具体的目的があった。これ

に対して、政権獲得直後から行われた郊外における建設活動は、建設されたバグが一族に分与されているように、あくまで私的なものであった。そのため、モハンマド・タギー・ハーンの晩年によるやくワクフとなったが、カナートの水利権の一部を、管理人である自分にその用途をすべて託したかたちで行われたのである。このように考えると、この水利権、バグのワクフにおいては、宗教的動機のほか、子孫のためのカナートとバグの施設維持と水配分の固定化という意図が含まれていることがわかる。水利の乏しいヤズド地方においては、カナートを守ることが一族の私有財産の維持の必要条件だったのである。

3. 第二世代の活動

(1)建設活動

モハンマド・タギー・ハーンには、男子が22人、甥が二人いた。JJにより、彼らの建設活動をまとめたのが、表3である。ヤズド知事となったアリー・ナギー・ハーン、ゼイノル・アーベディーン・ハーン、アブドッ・ラヒーム・ハーン、アブドッ・レザー・ハーンの4名、ケルマーン知事を務めたモハンマド・ハサン・ハーン、ウラマーの長であるモッラー・バーシー *mollā bāshī* となったミールザー・モハンマドなど、一族のうちでも要職を務めた有力者が、やはり多くの建設活動を行っている。

建造物の地理的分布をみると、モハンマド・タギー・ハーン時代と比して、郡都での建築が多い。これは、ハーン家の支配が郡代官の任命等によって次第に郡部に浸透していったことを反映していると思われる。アバルグーフやラフサンジャーが含まれているのも、やはり、一時期その統治がハーン家に委ねられたことによる。モハンマド・タギー・ハーン時代を含めて、彼らが統治した地方以外には建造物は全く見られない。彼らの建設活動が、その地方支配と密接に係わっていたことを示している。

ヤズド市においては、モハンマド・タギー・ハーンと同様に、市壁外・バーザール地区に集中して建設活動が行われている。バーザ

ール地区には、アリー・ナギー・ハーンの建てたマドラサのほか、アブドゥ・ラヒーム・ハーンが二つの商業施設を建設した。列状のバーザールには靴屋が店を構え、その入口にティームチェ（卸売商人の事務所・小型のハーン）があった⁽⁵⁴⁾。メフリージェルド門に接して建設され、アブドゥ・ラヒーム・ハーンの名を冠した現存するマドラサの位置から（図2）、今日 Bāzār-e Khān として知られる目抜き通りと重なっていたと考えられる⁽⁵⁵⁾。

政治・行政施設として、アリー・ナギー・ハーンは新たに謁見場（divān-khāne）を建設し、これはハーン家が知事職を失ったのちもヤズド知事によって使用された。アブドゥ・レザー・ハーンは戦争に備えて、市壁の修理とその外側に外市壁を築いた。図1が示すように、旧来からの市壁の中心がモンゴル時代に建てられた集会モス

表3 第二世代の建設活動

| 人 名 | ヤズド市 | 郡部 | その他 |
|------------------------|--|--|---|
| 'Ali Naqī Kh. (長男) | ・マドラサ(バ) ・ホセイニーエ(内) ・謁見場 ・バーグ(近) | ・ Q. Hemmat-ābād (Ashkazar)村 ・バーグ(Taft) | |
| 'Abd al-Rahīm Kh. | ・ Q. Rahīm-ābād (近) (村) ・ 列状バーザール (バ) ・ ティームチェ (バ) | ・ Q. Bāqer-ābād (Bāfq) (村) ・ Q. Rahīm-ābād-e 'Oliyā(Bāfq) ・ Q. Moḥammad- ābād(Bāfq)道 ・ Q. Tāher-ābād (Bāfq)耕地 ・ Q. Rahīm-ābād-e sefli(Bāfq) バーグ、道、建物 ・ Q. Mehr-ābād (Bāfq)バーグ、住宅 ・ Q. Rahīm-ābād (Behābād) | ・ 泉 Na'īm-ābād (村) ・ 泉 Shāh-ābād (村) ともに(Rafsanjān) |
| Zeyn al-'Ābedīn Kh. | | ・ Q. Zeyn-ābād (Taft) (村) | |

| | | | |
|-------------------------|---|---|--------------------------------|
| 'Alī Akbar Kh. | ・列状バーザール (外) | ・カナート・マズラエ (Poshtkūh) | |
| 'Alī 'Askar Kh. | | ・マズラエ(Miyānkūh) ・カナート、バーグ (Taft) ・バーグ(Taft) | |
| Moḥammad Ḥasan Kh. | | ・Q. Ḥasan-ābād (Rostāq) (村) ・Q. Ḥoseyn-ābād (Rostāq) (村) | ・Q. Mehr-ābād (Abarqūh) (村) |
| Aḥmad Kh. | ・バーグ(近) | ・カナート・マズラエ (Miyānkūh) ・バーグ(Rostāq) | |
| Moḥammad Ebrāhīm Kh. | | ・Q. Ebrāhīm-ābād (Rostāq) (村) | |
| Mirzā Moḥammad | ・バーグ(近) ・水車 | ・Q. Moḥammad- ābād-e Raḥīmī (Mehrijerd)村再建、 農地 ・カナート(Poshtkūh) バーグ ・バーグ(Rostāq) | |
| 'Abd al-Rezā Kh. | ・Q. Ja'far-ābād (Merijerd, 近) ・Q. Najaf-ābād (近) (村) ・Q. Faṭḥ-ābād村 再建(近) ・バーグ修復(Yazd) ・Q. Āb-e jadīd (近)修復 ・ガナート(近郊) (村) ・エマームザーテ修 復 ・ホセイニーエ ・家屋〔浴場〕 ・市壁の修復 ・外市壁 | ・Q. 'Alī-ābād (Mehrijerd)村 ・Q. Zeyn-ābād (Mehrijerd)村 ・Q. Shād-ābād (Prshkūh)バーグ ・バーグ2戸(Taft) ・バーグ修復(Taft) ・市壁(Bāfq) ・レバート(Mehrijerd) ・水車(Taft) | |

| | | | |
|------------------------|--|--------------------------|--|
| Mohammad Ja'far Kh. | | ・マズラエ(Miyān- kūh)池、建物 | |
|------------------------|--|--------------------------|--|

Q: カナート 内: ヤズド市壁内 外: ヤズド市壁外 バ: ヤズド市バーザール地区 近:
近郊 (村): カナート・泉と同名の村落が、村落リストで確認されたもの
典拠

JJ 493-498, 502-503, 513-518, 531, 705-721, 762-763, 765, 768-769, 775-776, 779, 792-794.

クにあるのに対し、この外市壁の中心はハーンのマドラサやハーンの広場を中心とするバーザール地区にある。これも先に述べた都市ヤズドの発展を示している。

また、興味深いのは、Shāhzhāde Fazl というエマームザーデに関するエピソードである。これはシーア派七代イマームの息子の墓廟とされているものである。ファトフ・アリー・シャーの第4皇子モハンマド・ヴァリー・ミールザーがヤズド知事となったとき、彼は謁見場建設用の資材を得るため、この墓廟を解体し、遺骨をイラクのシーア派聖地に移してしまった。アブドゥッ・レザー・ハーンがモハンマド・ヴァリー・ミールザーを追放して知事となると⁽⁵⁶⁾、彼は遺骨を取り戻して、廟を再建、これに付属するホセイニーエを建設したのである⁽⁵⁷⁾。このエマームザーデはかつてはゾロアスター教の遺跡であり⁽⁵⁸⁾、ヤズドの住民にとっては重要な聖所の一つであったと考えられる。中央から派遣された皇子はこれをないがしろにし、ハーン家は墓廟再建に尽力したのである。

カナートの建設はヤズド市、郡部いずれも盛んである。ヤズド市に直接かかわるものとしてアブドゥッ・レザー・ハーンによる Āb-e jadīde の浚渫が挙げられる。このカナートは14世紀から存在し⁽⁵⁹⁾、ヤズド市の多くの家はこの水を利用していた。このカナートが洪水のため二度にわたって崩壊し、住民は苦境に陥った。カナートの所有者達がアブドゥッ・レザー・ハーンに陳情した結果、彼は二度とも総計2500トマーンの費用を負担して、このカナートを浚渫した⁽⁶⁰⁾。

他のカナートの建設・再建は、多くの場合新村の開発を意味していた。これはモハンマド・タギー・ハーンがヤズド市近郊のバーク

建設に精力を傾けていたのと対照的である。JJの記述では、カナートも村もともに「…アーバード」と人の居住地を示す語がついていることもあり、カナートのみを建設したのか、それとも付随して新村も建設したのか、不明確な場合も少なくないため、表2では19世紀中葉と現代の二つの付名リストで補った⁽⁶¹⁾。(村)とあるのがカナートと同名の村が存在したことが確認できたものであり、かなりのカナートに村が付属していることがわかる。また、泉の建設が村の新設を意味する場合もあった。

このような村の建設の方法をよく示すのは、アリー・ナギー・ハーンによるヘンマト・アーバードの開発である。まず、水源がヤズド市近郊、出口がロスターグ郡のカナートを建設した。このカナートをアシュカザル村へ通し、この村の住宅に水を供給するとともに、ここに製粉水車を建設した。次に、出口付近の村の建設に着手し、1/4ファルサング(約1.6km)の村壁を築き、中に住民のための住宅と自分の滞在用の屋敷の建設に取り掛かった。村壁の外には、水蔵を建設した⁽⁶²⁾。この事業は、アリー・ナギー・ハーンのヴァズィールの監督のもとに行われており、知事によるカナートの建設が地方の行政機構を巻き込むかたちで行われたことを示している。また、この村とカナートの一部は聖地ナジャフに対してワクフとなっており(後述)、KMYの情報から逆算するとこの村の年収は1841年に1157トマーンであったことがわかる⁽⁶³⁾。

また、カナートは相続・売買可能なものであり、投資の側面を色濃く持っていた。たとえば、アブドゥ・ラヒーム・ハーンが建設し、のちに荒廃してしまったカナートは、彼の死後、相続人に相続され、弟のミールザー・モハンマドがこれを購入した。ミールザー・モハンマドはこのカナートを再建するとともに、同じく荒廃していたアルザンダーザーン村のカナートも購入し、前者の水をこのカナートに注ぎこんだ。これによって、50年にわたって荒廃していたこの村は再建され、カナートは50軒の家とモスク、浴場を潤したという。さらに、余剰分の水を別に購入・再建したカナートの水と併せて、ヤズド市近郊のモハンマド・アーバーデ・チャーフーク村まで

引き、この村の2000カフィーズ（約2.0km²）の土地を購入して、農業経営を行ったという⁽⁶⁴⁾。

アルザンダーザーン村がミールザー・モハンマドによってワクフとされていることからわかるように開発したバグや耕地は開発者の所有物となったから、このような開発事業は土地獲得の重要な手段であった。こうしてハーン家は膨大な資産を形成していったのである。

(2)ワクフ

史料KMYにはハーン家のワクフがモハンマド・タギー・ハーンのもの2件を含めて、14件記載されている。これは、KMYの総件数72件の1/5弱に過ぎないが、年収は総年収6000トマーン余りのうち1121トマーンを占め、全体の約39パーセントにあたる⁽⁶⁵⁾。KMYの調査がハーン家の失脚・流刑ののちに行われたことも考慮すれば、この数字は非常に大きいと言える。他の知事やヤズドの有力者のワクフ活動は、ハーン家には全く及ばない。

KMYに見られる第二世代によって寄進されたワクフ財を表にしたものが、表4である。寄進者として、知事経験者やモッラー・バーシーが挙がっている一方、女性も5名と半数近くを占めており、女性も主要な寄進主体であったことを示している。JJにはこのほかに、アブドッ・ラヒーム・ハーンによるカナートのワクフ、アブドッ・レザー・ハーンによるカナートと村落のワクフが記されているが⁽⁶⁶⁾、KMYの成立までに荒廃したらしく記載されていない。

ワクフ財について見れば、建造物同様、水利権と村落が中心となっている。その地理的分布も建設活動同様、モハンマド・タギー・ハーン時代に比べてヤズド地方の広い範囲にわたっている。自らの開発した新村を寄進する場合も多い。アブドッ・ラヒーム・ハーン、ゼイノル・アーベディーン・ハーン、モハンマド・エブラーヒーム・ハーンの場合、その妻が夫の開発した村を寄進している。モハンマド・タギー・ハーンの子の場合、父の建設したカナートの水利権を寄進している。これらの財産は相続や譲渡によってこれら女性の所有に帰したと考えられる。

既存のカナートの水利権や村落の取分を寄進した場合には、ハーンのマドラサのワクフ財と同物件の別部分も見られる。アリー・ナギー・ハーンのマドラサに対するワクフでは、ワクフ財として挙げられているカナートは Ya'qūbī を除いてすべて重なるし⁽⁶⁷⁾、モハンマド・エスマイル・ハーンの寄進した村落の取分も同様である。モハンマド・タギー・ハーンの財産が継承されたことを窺わせる。

バーザールや店舗は割合としては低い。ほとんどがヤズド市のバーザール地区に集中している。

次に寄進対象であるが、KMY の分類では「その他」、すなわち明確な対象が示されていないケースが目につく。すなわち、これらは、特定の施設の維持・運営を目的としたものではないのである。

表4 第二世代のワクフ

| 寄進者 | 寄進対象 | ワクフ財源 | 収入 | 管理人 |
|------------------|-------|--|--|-----------------------------|
| 'Alī Naqī Kh. | ・ナジャフ | ☆Hemmat-ābād 村 (Ashkazar) 6r(16r中) 〔付属する土地, 家屋, 浴場, 建物を含む〕 | 434t | 妹の息子とその子孫 1/6 |
| 'Ali Naqī Kh. | ☆マドラサ | ・店舗 (Meydān-e Khān) 4軒 7/9 ・店舗 (Meydān-e Khān) 4軒 ・水利権(Ya'qūbī: 近郊) 10j ・水利権(Moryābād: 近郊) 29j ・水利権(Jadīde: 近郊) 32j ・マズラエKhyāreq 2r ・水利権(Ṭohre) 1/2 ・靴市場(Meydān-eKhān裏) | 35t1800d 6t5000d 21t6500d 2t2850d 0d 荒廃 荒廃 | 妹の息子とその子孫 |
| 'Alī Naqī Kh. の妻 | | ★水利権(Dowlat-ābād 上) 86j 4d ・バン屋(Mehrījerd門) 1軒 ・八百屋(Mehrījerd門) 1軒 | 95t3350d | Mīrzā Seyyed Ḥasanの妻 1/5 |

| | | | | |
|------------------------|--|--|---------------------|----------------------------|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ☆バーク(Taft : 倉、建物、水利権) ・水利権(Do raqam) 82j ・漆喰屋(Mīr Chaqmāq) 1軒 ・店舗(Bāzārche-'e As'ad) 3軒 ・菓子屋(Meydān-e khān) 1軒 ★水利権(Baghdād- ābād) 8j ・水利権(Yūsof-e Shāhī : Bāfq) 1ṭāq ・水利権(Hanīye : Bāfq) 17ḥabbe | | |
| 'Abd al-Rahīm Kh. の妻 | | ☆Rahīm-ābād村(近郊) 4r | 136t | 兄弟の息子とその子孫 |
| Zeyn al-'Ābedīn Kh. | | ☆Zeyn-ābād村(Taft) 4r 〔バークとその建物を含む〕 | 122t4000d | Mīrzā Aḥmad 1/6 |
| Zeyn al-'Ābedīn Kh. の妻 | | ☆Zeyn-ābād村(Taft) 2r | 61t2000d | Mīrzā Seyyed 'Alī Rezā 1/6 |
| Mḥd Ebrāhīm Kh. の妻 | | ☆Ebrāhīm-ābād村(Rostāq) 1/24 | 33t | Mīrzā Ebrāhīm |
| Mḥd Esma'īl Kh. | | ・ Shams-ābād村(Meybod) 4ṭassūj | 31t7000d | 息子とその子孫 |
| Mīrzā Moḥammad | | ☆Arzandāzān村 (Mehrijerd)と付属物全部 11r | 518t7500d | 長男とその子孫 |
| Mīrzā Moḥammad | | ☆モスク前の小パーザール ★水利権(Dowlat-ābād上) 10j | 7t2000d 11t0000d | |
| Mḥd Taqī Kh. の女子 | | ★水利権(Dowlat-ābād上) 10j | 12t2000d | Mīrzā 'Alī Rezāの女子 |

| | | | | |
|-------------------|--|--|---------------------|--------------|
| Mḥd Ja'far Kh. | | ・ Ja'far-ābād村(Rostāq) 1r ・ Ḥoseyn-ābād村 (Ardakān) 2r | 40t 70t5000d | 男系の子孫 1/5 |
|-------------------|--|--|---------------------|--------------|

典拠 KMY 20, 27-28, 31-32, 40-41, 44-48, 54

j : jorre. dg : dāng. ṭāq, ḥabbe, ṭassūjとともに水利権の単位。カナートによって異なる。

r : rūzshabān ここでは、村・耕地の持分の単位。水利により異なる。

t : tomān d : dīnār

☆ 寄進者が自ら建設したもの ★ 一族のものが建設したもの

その支出目的を分類すると(1)巡礼者・セイエド・貧民の援助に関するもの(2)アーシューラーとタアズィエ、ラガーイブの夜⁽⁶⁸⁾、断食明祭、犠牲祭、ガディール祭⁽⁶⁹⁾など宗教行事の後援とその際の食事・砂糖菓子・スープの餐応の二つがほとんどである。こうした目的は、前述のようにモハンマド・タギー・ハーンのワクフの中にも含まれていた。また、KMY全体でもこの種のワクフが半数近く占めていた。彼らが大きな施設を建設しなかったこと、ワクフの規模も年収の点で小さいものが多いことを考えあわせると、これらのワクフは手軽な個人的慈善行為として、広く行われたのだと考えられる。もちろん、町で行われる宗教行事は自らの有力者としての立場を示す絶好の機会であったことも見落としてはならない。

もちろん、これらのワクフには親族・子孫への配慮も見られる。全収入からワクフ財にかかる税とワクフ財の維持費を差し引いたのうち、1/5から1/6が管理費としてワクフ管理人の取分となっているが、この管理人には多くの場合、寄進者の子孫や縁者が任命された。子供のなかったアリー・ナギー・ハーンは、妹の子二人を管理人に任命しており、この二人はハーン家と10件の婚姻関係を結んでいる Mirzā Moḥammad の家系に属する。ワクフ財が荒廃しないかぎり、彼らは安定した収入を得ることができたのである。

おわりに

以上のように、ハーン家の建設活動とワクフの実態がかなりの程度まで明らかになった。このような作業が可能となったのは、史料JJが詳細にハーン家の建設活動について記しているためであるが、それではここまで詳細に記したのはいったい何の目的のためであろうか。JJにおいてはハーン家の一人一人の経歴を述べたのちに、「慈善の事跡」(āṣār-e kheyr) や「喜捨」(ṣadaqāt) として建造物について言及するという形式をとっている⁽⁷⁰⁾。マドラサの建設やワクフ行為のみならず、カナートの建設や新村開発までが、彼らの讃えるべき善行なのである。JJが常にハーン家のヤズド支配を正当化しようという志向をもっていることを考慮すれば、JJの著者にとってこれらの建設活動は宣伝に値するものであったということになる。これまでの検討で示したように、ハーン家はヤズドに対してマドラサと店舗からなるバーザール地区の開発、多数のカナートの建設、エマームザーデの再建、タアズィエへの出資などきめ細かな貢献を行い、これがヤズドに繁栄をもたらした。時折見られる住民のハーン家への支持を見るとき、このような正当化の試みはある程度成功していたと言ってよいであろう。厳しい戦乱の時代を自力で生き抜くためには、住民の支持は不可欠であり、それを得る手段の一つがこうした建設活動だったのである。前稿で、ハーン家が地方社会に根を張る形でその支配力を強化したことを指摘したが、ワクフや建設事業もその一つの根と考えるとよいだろう。

彼らのワクフとして寄進した不動産のリストと彼らの建造物のリストから、彼らの財産が主にカナートの水利権とそのカナートが潤すマズラエ、バグ等の莫大な不動産からなっていることが明らかになった。しかし、これをもって彼らの経済基盤はこれらの不動産にあったと結論づけることは躊躇せざるをえない。というのは、ヤズドの支配者となる以前、特に有力であったとも思えないハーン家にとって、既存のカナートや土地を購入するにせよ、新たにカナートを建設し新村を開発するにせよ、当初は膨大な資金が必要だった

はずだからである。この資金源として考えられるのは、彼らの地方の支配者としての権限である。ザンド朝史料がモハンマド・タギー・ハーンを税の着服のかどで非難していること⁽⁷¹⁾、大規模な建設事業は知事経験者によって行われており、地方政庁を巻き込む形をとっていること、ハーン家の建築した諸施設が自らが支配したヤズドを中心とした地域に限られていることなどから、州財政の柔軟な運用こそがこれらの費用の出所であったと思われるのである。知事とならなかった者もたとえば郡代官 (nāyeb-e bolūk)⁽⁷²⁾などの職について、かなりの収入を得ることが可能であった。徴税をはじめとする地方行政の掌握が、彼らの資産形成の第一歩であったと考えられ、資産の投資と新村開発の結果、ヤズド市のワクフ財の4割近くをハーン家のワクフが占めるに到ったのである。

これらの建設事業やワクフそのものは、程度の差はあれ、イランのさまざまな時代のさまざまな地方に見られる現象である。しかし、KMYを調べる限り、この時代にヤズドでハーン家に匹敵するワクフを行った者はいない。中央から派遣された知事は地方社会とは一定の距離を保ち、また他の住民はハーン家のように政治権力を利用することができなかったためだと考えられる。ハーン家はこのような意味で、地方社会に確固とした強力な基盤を持っていたのである。そして、仮に、18世紀末までにイラン各地に割拠していた諸勢力が同様の基盤を持っていたならば、イランの再統一を目指すガージャール朝にとって、これらの勢力に対する対策が大きな課題となったことは疑いない。今後は、他の地方勢力の事例を検討すると同時に、これらの地方勢力の存在がガージャール朝の国家構造にいかなる影響を与えたか、王朝がこれらの地方勢力にどのような対策を取ったかを明らかにしなければならない⁽⁷³⁾。

文献略号

TJY : Aḥmad b. Ḥoseyn b. ‘Alī Kāteb. *Tārīkh-e jadīd-e Yazd. be-kūshesh-e Īraj Afshār*. Tehrān. 2537Sh.

TY : Ja‘far b. Moḥammad b. Ḥasan Ja‘fari. *Tārīkh-e Yazd*, be-kū-

shesh-e Īraj Afshār. Tehrān. 1343Kh.

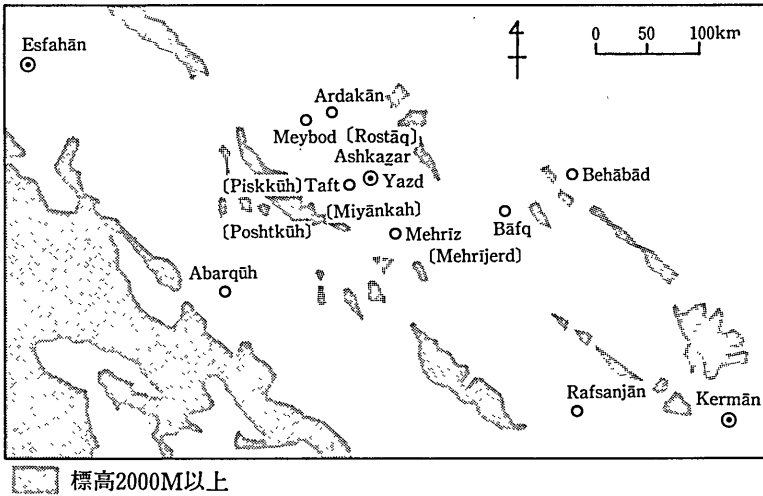
JJ : Moḥammad Ja'far b. Moḥammad Ḥoseyn Nā'ini Ṭalab. *Jāme'-e Ja'fari*. be-kūshesh-e Īraj Afshār. Tehrān. 1353Kh.

JM : Moḥammad Mofid Mostowfi Bāfqī. *Jāme'-e Mofidi*. jeld-e sevvom. be-kūshesh-e Īraj Afshār. Tehrān. 1340Kh.

KMY : 'Abdol Vahhāb Ṭarāz. "Ketābche-'e mowqūfāt-e Yazd". be-kūshesh-e Īraj Afshār. *Farhang-e Īrān-zamīn* 10 (1341Kh) § 1-123.

YY : Afshār, Īraj. *Yādgarhā-ye Yazd* ; jeld-e dovvom. Tehrān. 1354 Kh.

図4 ヤズド付近



M. Bonine. "From Qanāt to Kort," *Iran* 20(1982), p. 146 の Fig. 1 をもとに作製

註

(1) ただし、総論としてはあるが、ペトルシェフスキーは土地制度から、リックスは貿易からこの問題に取り組もうと試みている。И. П. Петрушевский, Очерки по истории феодальных отношений в Азербайджане и Армении в XVI—начале XIX вв., Ленинград, 1949 ; T. M. Ricks, "Politics and Trade in Southern Iran and the Gulf, 1745-1765", Ph. D. dissertation, Indiana University, 1975.

(2) 拙稿「ヤズドのモハンマド・タギー・ハーンとその一族——18・19

- 世紀イランにおける地方有力者の実像」【史学雑誌】第102編第1号(1993年), 1-36頁。
- (3) この史料を利用した邦文の研究として, 岩武昭男「イランにおけるワクフの継続——ヤズドにおけるアミール・チャクマークのワクフの事例」【イスラム世界】42号(1993年), 1-19頁。
- (4) YY 374-386. また, モハンマド・タギー・ハーンの建設したカナートに関するワクフ文書は JJ 345-362に収められており, 同一テキストが YY 734-746にも収められている。
- (5) M. E. Bonine, “Islam and commerce: waqf and the bazaar of Yazd, Iran”, *Erdkunde*, 41 (1987) pp. 182-196. この論文に含まれているヤズドのバーザールの地図は有用である。ペルシア語のものとしては, YY のほか, ‘Abd al-Ḥoseyn Āyatī, *Tārīkh-e Yazd*, Yazd, 1317Kh. にハーン家の建築物, ワクフに関する記述がある。
- (6) 前掲拙稿, 11-12頁。
- (7) ヤズドのカナートに関する研究として, M. E. Bonine, “From Qanāt to Kort: traditional irrigation terminology and practices in central Iran”, *Iran* 20 (1980) pp. 145-159.; A. K. S. Lambton, “The Qanāt of Yazd”, *Journal of Royal Asiatic Society* (series 3) 2 (1992) pp. 21-35.
- (8) たとえば, 15世紀に成立した「ヤズド史」【新ヤズド史】はいずれもヤズドのバークに関して一章を割いている (TY 167-176; TJY 197-213)。
- (9) JJ 343.
- (10) JJ 352; YY 739 (Qanāt-e Dowlat-ābādに関するワクフ文書)。なお, JJ 343では, Qanāt-e Mahdī-ābādはモハンマド・タギー・ハーンが建設したことになっているが, ここではワクフ文書に従って購入・浚渫したと考える。また, Qanāt-e Baghdād-ābādは14世紀前半のワクフ文書集 Jāmi‘ al-khayrāt のなかに見える (YY 471)。このワクフ文書集については, 岩武昭男「ニザーム家のワクフと14世紀のヤズド」【史林】72巻3号(1989年) 1-46頁参照。
- (11) Āyatī, *Tārīkh-e Yazd*, s. 342.
- (12) JJ および YY に収められている Sāzmān-e mellī-e khefāzat-e āṣār-e bāstānī-e Īrān, “Naqše-e Bāgh-e Dowlat-ābād” 参照。
- (13) JJ 353-358; YY 740-743.
- (14) JJ 712はこのバークが後に荒廃したことを伝えるが, 後継者アリ・ナギー・ハーンが新たに別の謁見場を建設したために, このバーク

が政治的機能を失ったことがその一因であったと考えられる。

- (15) JJ 368.
- (16) JJ 368-369.
- (17) いわゆるキャラヴァンサライをJJは ① kārṽānsarā ② khān ③ rebāt の三つに区別している。このうち②は町中のバーザール付近にあり、卸売商人が常駐している。③は丘陵部の街道沿にある宿駅である。これにたいして①は市壁外にあり、隊商の発着駅となったと考えられる。このようなキャラヴァンサライの分類については、YY 767-768; M. Bonine, *Yazd and its hinterland*, Marburg/Lahn, 1980, p. 106, n. 33.
- (18) これらモハンマド・タギー・ハーンの建てたバグの記述は、JJ 370-379.
- (19) ヤズドにおける街区の変遷については、YY 781-793 参照。
- (20) N. Malcolm, *Five years in a Persian town*, London, 1905, pp. 9-10.
- (21) J. B. Fraser, *Narrative of a journey into Khorasan in the years 1821 & 1822*, London, 1825, rep. New Delhi, 1984, appendix 21; K. E. Abbott, *Cities & trade: Consul Abbott on the Economy and Society of Iran 1847-1866*, ed. by A. Amanat, London, 1983, p. 133.
- (22) J. D. Gurney, "A Qajar households and its estates", *Iranian Studies* 16 (1983) pp. 137-176. 19世紀末のマシュハドの例であるが、バグで栽培された飼葉から150トマーン、果物から180トマーンの収入があったという。
- (23) JJ 411.
- (24) KMYはMasjed-e Ḥājjī Ebrāhīmの項で、このモスクの荒廃の原因を市壁内のバーザールが衰退し、市壁外のバーザールが発展したことに帰している (KMY 19)。
- (25) ヤズドにおいては14-15世紀に盛んにマドラサが建設されたが、いずれもサファヴィー朝末期までには荒廃してしまった (JM 659)。当時機能していたのは、サファヴィー朝に建設されたMadrase-'e Moṣallā とMadrase-'e Shafi'iyye の二つのみであった。
- (26) JJ 383. なお、1241/1826年のMadrase-'e Shāhẓādeのワクフ文書の証人の記載によって、それぞれのマドラサの学生数が判明する。それによれば、Madrase-'e Shāhẓāde (大) 12人、(小) 6人、Madrase-'e Khān 20人、Madrase-'e Moṣallā 4人、Madrase-'e Shafi'iyye 9人となっている (YY 580)。

- (27) この事件で同派の教主 Mirzā Khalil-ollāh が殺害された。cf. JJ 558-566; F. Daftary, *The Ismā'īlīs : their history and doctrines*, Cambridge, 1990, p. 504.
- (28) JJ 381.
- (29) JJ 382.
- (30) YY 580 (Madrās-e Shāh-zāde のワクフ文書の証人の記載)。
- (31) JJ 382. なお、ザンド朝期およびガージャール朝初期には、銅貨のほか、王朝君主の名を刻んだ金貨と銀貨がヤズドで鑄造された (H. L. Rabino, *Coins, medals and seals of the Shāhs of Irān, 1500-1941*, n.p., 1971)。
- (32) YY 701-2.
- (33) KMY 32.
- (34) L. W. Adamec, *Historical gazetteer of Iran*, Graz, 1976-89, vol. 1, p. 690.
- (35) JJ 381.
- (36) このモスクについては、KMY 17; YY 197-206.
- (37) このモスクについては、JJ 622-623; KMY 18-19; YY 225-226.
- (38) JJ 340.
- (39) Abbott, *op. cit.*
- (40) JJ 380.
- (41) Mobārake は Jāme' al-khey-rāt のなかに見える (YY 400)。Cham は、モザッファール朝の Shāh Yahyā が建設を行った記述が『新ヤズド史』にある (TJY 218)。
- (42) JJ 379.
- (43) JJ 380.
- (44) このような農業経営形態については、岡崎正孝『カナート——イランの地下水路』論創社、1988年、203-207頁。
- (45) 実際には、長男・三男には子がなかったため、今世紀にいたるまで、アブドッ・ラヒーム・ハーンの子孫がこの職を継承していた (Āyati, *Tārikh-e Yazd*, §. 377-8)。
- (46) ボナインは、KMY のみに基づいてこのワクフを論じており (Bonine, "Islam and Commerce" p. 189-191), カナートの比定においても誤りを犯している。
- (47) Tohre を除いて、すべて、Jāmi' al-khay-rāt のなかに見える (YY 404, 528, 437, 400, 493, 490)。地方史の記述によれば、Gord-farāmarz はセルジューク朝時代 (12世紀; TJY 64), Moryābād はア

ターベク時代(13世紀; TY 41), Abromobārek はセルジューク朝時代(11世紀; TY 179)に建設されたという。Ṭohre は, 1068/1657年の建設(JM 697)。

(48) JJ 310.

(49) YY 385.

(50) YY 378.

(51) この chahārdah ma'šūm に対するワクフ行為のほかの例として, サファヴィー朝のシャー・タフマースプおよびシャー・アッバースによるものが知られている(B. Fragner, "Social and internal economic affairs" in P. Jackson and L. Lockhart eds. *The Cambridge History of Iran vol. 6: the Timurid and Safavid periods*, Cambridge, 1991, p. 521)。

(52) KMY 27.

(53) JJ 359; YY 743-734.

(54) JJ 516.

(55) このバーザールは, 19世紀後半に Moḥammad Khān Vāli によって建設されたとされている(YY 765-6: Bonine, "Islam and commerce", p. 186)。アブドゥッ・ラヒーム・ハーンのマドラサについては, JJ には記述がないが, KMY にはアブドゥッ・ラヒーム・ハーンの子のワクフの項に記されている。ここで, このワクフの用途として「アブドゥッ・ラヒーム・ハーンの子に新しいマドラサを建てる費用」とされていることから, KMY 成立の時点でこのマドラサが完成していない可能性がある(cf. YY 609)。

(56) この経緯については, 前掲拙稿, 17-18頁。

(57) JJ 716-718.

(58) YY 340.

(59) 注45参照。

(60) JJ 712-715.

(61) Abbott, *op. cit.* pp.140-144. *Farhang-e joḡhrāfiyā'ī-e Īrān*, jeld-e hashtom va dahom, Tehrān, 1332Kh.

(62) JJ 493-495.

(63) KMY 28.

(64) JJ 792-793.

(65) ただし, KMY においてその年取の記載がないものは, 合計には加えていない。

(66) JJ 517, 709.

- (67) Ya'qūbī もまた, Jāmi' al-khayrāt に見える (YY 400)。『ヤズド史』によれば, 432/1040-1年の建設 (TY 181)。
- (68) 死者のために善行を施すラシャブ月の最初の金曜日。
- (69) 預言者ムハンマドがアリーを後継者に指名したとされるシーア派の祝日。ズール・ヘジェ月18日。
- (70) たとえば, JJ 494, 513, 705.
- (71) Abū al-Ḥasan Ghaffārī Kāshānī, *Golshan-e Morād*, be-eh-temām-e Gholāmrezā Ṭabāṭabāyi Majd, Tehrān, 1369Kh, ṣ. 736.
- (72) この郡代官職に関してはいずれも別稿で論じたい。
- (73) このような観点から興味深い研究として, 小牧昌平「19世紀初頭のホラーサーン——初期のカージャー朝についての一試論」『上智アジア学』第10号 (1992年) 17-42頁。